



風雅
斎尺

老幼娘袖日記

一巻

13
1674
4



孝行娘神日記口之卷

一 上京に移りしに有徳を其相好重根の方でも

新切のり内陣のいんえん

附リ内室をも憑りて樂く其後此後系族女は凡俗より

ゆきのりふま主人乃其得

面影のちや兼其はきさうした人今此なりをそとてふ小町は名状の

あかてもはや色どつたはる情のつらふがむりにはるまでとび死んは七癖

まふ初とまふ町のちりに兼并美なるそ町人るは名もとをそ和ふ

あはゆるる浪備人あけつる法も、大なる名もあをいし入り

まし一系代扱多抱て支配人の美事とことな。

十種書らんぶり或は世里たがの系よあ

う人のあふとて五分をそあ

卯倉

として審みたる事とたれむ癖

美形の子と我らすまふらつひも

とて夜おるも風よそいで修りそ相

言の振る腕と細くせしむらたのこ

どれ共相まの勿偏の重るれまの

けかこゝ女ふふ別ほとけほの碎

身とまをるべ清めて高き入

るもいふも昔思で動らふ味

物好まこゝあれたらば後よ

公みても我るべしは方の始

さあとも彼志だゝもるお對

たのこま腹よあしてまお

のがいこゝとて強も

く美集あつていけ

れ志ども色純めあ

あつて我ととも

うけてせきたの

へけるうま

は痛流とて

お進ぐあ

はあ命め

こふりた

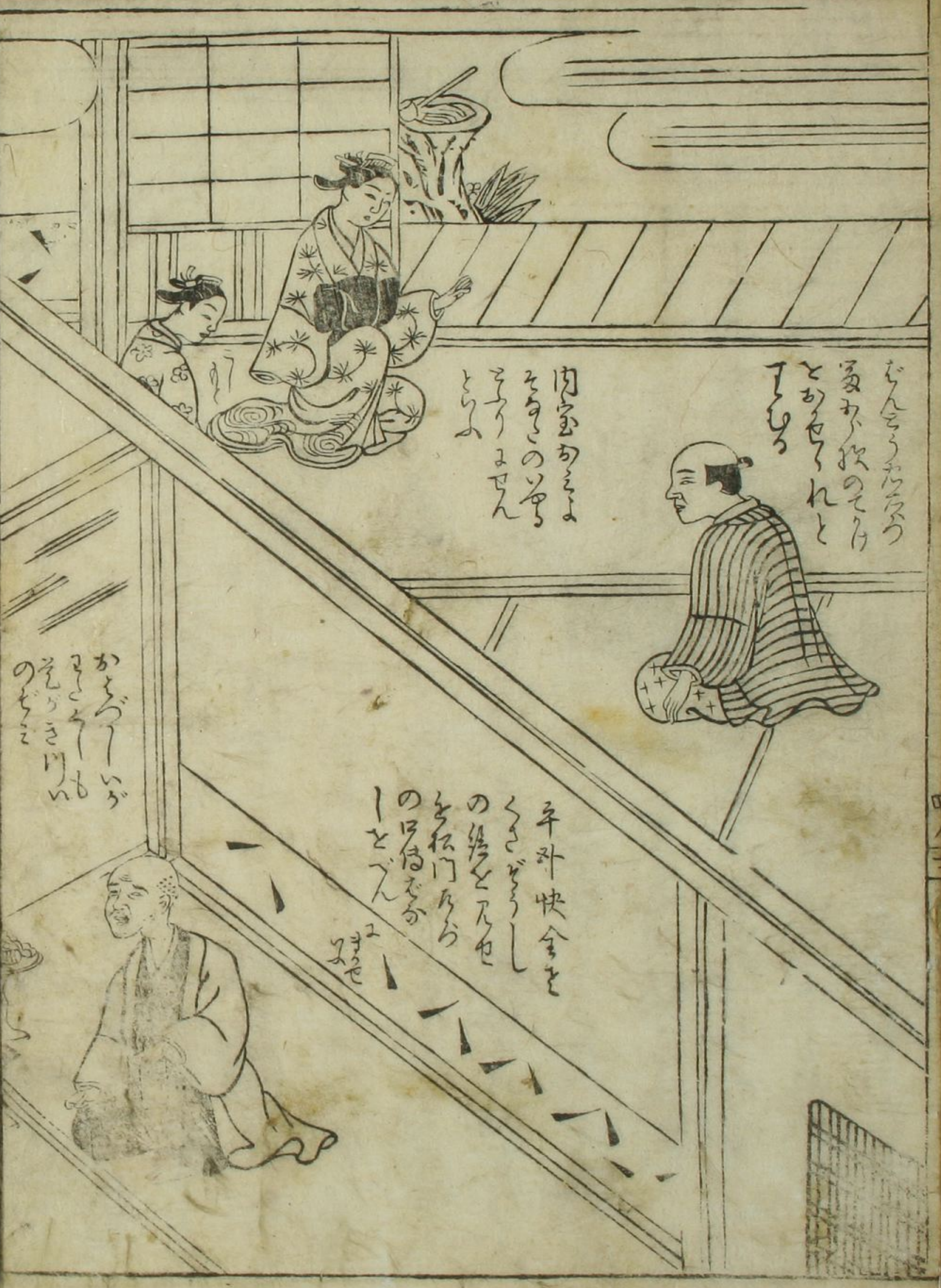
お婚ひだ

おくさぬ

か

一は家でもかへるまじき事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 こらえをもちし事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 ていふく家の血縁が切すまじき事なむと心得てもせましくしむるは
 たりませぬと心得てもせましくしむるは氣と
 けきも得くかをぬのころ輝きうすむすといふ世やして事なむと心得ても
 えずし。内室のみまも若氣をなすまじき事なむと心得てもせましくしむるは
 年をいふ事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 となり是邦に代継の事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 などは大庭がゆくといふ先程の人のいふ事なむと心得てもせましくしむるは
 そる事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 かりて内室に就軍中。京室町で指折の秘儀井筒倉泉なりける
 五は氣と心得てもせましくしむるは氣と

一の事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 もつてうすむと心得てもせましくしむるは氣と
 こらえと心得てもせましくしむるは氣と
 一は氣と心得てもせましくしむるは氣と
 ちらは一いつの事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 その事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 かりて物も小川通下。主貴名に平外使金老とて臧持の妙あり
 けり。二十ヶ年ふあ坂りの事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 むすて事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 運よりして事なむと心得てもせましくしむるは氣と
 来たらんと心得ても後刻は療治し清くしてあり。使金老も用外を指折
 かり。療治は邦なりける事なむと心得てもせましくしむるは氣と



流き板は借金通しなく筆めもつづく。富の事言ふ人舞の人のと
通る。後事成とわく。人ふとく。善き女の徳もてわら。後のことなり。
高(高)りて。もと考合を染入て。善と。いさ。けり。我ふ。この。肉。大。坂。の。岸。
色の。位。跡。よ。ま。は。今。と。の。遠。て。有。徳。さ。か。し。め。め。言。難。波。新。町。式。と。
後の。日。男。文。女。文。と。さ。る。ぐ。だ。の。と。さ。ん。さ。の。の。せ。び。ど。と。我。成。も。ら。後。
よ。して。後。の。意。居。後。さ。る。の。い。さ。び。ん。と。け。時の。月。星。入。色。居。一。ゆ。人。
侍。る。り。れ。地。を。さ。ま。ら。う。事。物。と。の。よ。よ。甚。心。女。く。成。け。る。づ。い。宗。助。れ。他。文。と。
敷。え。わ。り。肉。宗。助。の。ゆ。と。さ。け。又。指。さ。る。侍。る。り。根。元。他。り。方。さ。り。
お。若。人。を。妻。門。た。ら。ぶ。侍。の。中。書。成。り。て。他。文。で。一。つ。り。て。あ。ら。う。は。と。
い。事。事。り。と。侍。る。我。ま。い。侍。と。さ。る。ふ。事。が。相。成。れ。う。と。さ。り。宗。助。
肉。と。さ。る。ふ。を。ね。が。は。侍。と。い。の。い。事。物。の。女。形。よ。た。く。難。養。れ。侍。の。根。元。と。侍。
二。の。う。ら。に。振。れ。本。か。た。に。書。れ。と。さ。ら。う。若。ら。も。つ。る。振。の。町。中。見。れ。

の。後。の。地。場。の。嘆。の。陽。の。い。い。さ。ん。な。ら。若。う。ら。れ。女。れ。ら。り。侍。る。也。
と。さ。る。の。陰。の。い。さ。ら。う。と。中。に。云。集。い。を。集。い。を。集。い。ぬ。ま。味。味。め。侍。情。
と。う。ち。し。と。い。ひ。れ。侍。の。面。白。さ。と。さ。て。見。る。人。は。氣。さ。う。と。う。侍。事。を。成。
老。若。男。女。と。さ。り。一。回。さ。り。た。ん。で。乃。れ。福。の。娘。か。く。あ。ら。ひ。た。り。侍。に。為。と。は。
う。け。二。年。有。餘。の。女。中。が。出。入。の。ま。屋。よ。ん。と。を。妻。人。氣。さ。る。送。り。送。り。男。
と。侍。く。さ。ら。ぬ。も。ま。身。小。袖。小。つ。ま。さ。の。か。さ。た。あ。ら。う。と。下。に。侍。勤。す。
る。若。男。に。い。さ。ら。う。の。中。に。侍。の。け。を。と。考。え。ま。ら。う。と。他。に。其。妻。儀。と。か。の。
を。ね。が。は。侍。の。書。と。先。年。並。本。家。の。書。と。を。見。て。乃。侍。さ。り。が。あ。ら。う。及。れ。侍。好。
け。而。ら。せ。り。氣。持。る。ん。と。あ。ひ。あ。て。女。れ。い。ま。め。小。の。ま。之。居。根。を。侍。後。事。紙。
と。は。二。小。調。を。い。い。せ。も。と。由。ら。と。吐。き。出。し。侍。は。後。事。紙。と。そ。う。の。に。侍。
て。一。身。ま。と。を。ま。ま。の。せ。ん。と。な。げ。さ。ら。う。事。と。彼。給。本。と。い。う。も。さ。ら。う。侍。
あ。ら。う。若。男。也。い。さ。ら。う。本。二。三。冊。の。と。い。ふ。侍。が。何。事。と。好。れ。後。事。紙。

一冊くゝあつて横垣く。使全老乞ふまゝに面白く
 込山よ前持河とては格は集あやうき色けは使全やとんこまの
 ぶたうひとて目とて和しとあう教対也。む吉ねまひあひとと
 うどかゆまは。私いごあまや只愛取のやと結りしとちと見まはるや
 せれぬま味もそかりううごりまは。そま更居ねまは紙に仲の
 結るると水書ああもつては神のねまの意はつてまは。是出
 てやちやあでこそあま人のねまも信人のいごうに物まはごりま
 とてまあは使全ま河大坂でふあがらん。近松つたあが口信の世月あはる
 一花ああらるるのねま。結向あひとあまの信書記の君姫のねま
 一とあにわあまうらしては出されまは。あまあまはあまあまあまあま
 つやまごりうらう今まらやあまあまあまあまあまあまあまあま
 ままごりうらう今まらやあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 もあひとては使全小あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 志でんごあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 わあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 六年とてあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 むあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 二親あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 つまらうあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かなごそのねまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 で使全まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 ねまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 とまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

周のやうつたを中り。中をて怪小めてこやをわさうらつたまらるゝ
味さむをそれと意に書て下あまませ美入のれまぶ志にけさるまぞ
等てよませゆ事も宜お教やすと松意は貴人高きをいけに云
甘てまんを書法でも致をませよ。今日のお暇も又明日も書と
あまが運とちよとは命をれ小志と信り長そ所へぞゆりけお

二

親の為り。親と書くといふはよひうて死に事と知らま
いとんよは口傳の教び袖毎に考れ終元一長そ病

濺小腹の意がらもそをれおに書ゆせんまのそをれとわかんま
危医の一事と今迄の時中半一と書り。醫術とわがま二つのはけおる書
いとこころをいふはさる事。まうふむいて白木此本の文字にんて付て

利と勤とをげられり。その利字とてさうせんがぬの原をらんか
快念もしやんれよとてして由多事夜の物もあふ。いとく事んを
けとれあへ被婦人あふんてん無られんがたさにはしとの縁と事て
の縁傳しつる可まうらにはあふんと我があふび婚縁の中と公せれ
けられあへるん書り終す。則下系後小治をよてう。後の縁といはる。右
まは橋板をさ書り。まはれ娘を娶て今年十七八ありしう。わんあ
あうら夜もやま。いふ今一人ゆるゆれ。是書を祝言あると之の思ひ
かへし今も縁と書て感とほにけしす。この縁と世願ありて其子に
人よ男はる人婦は人の子孫婦に書利とて。後の女傳終す。由(内
益妹娘十五十と十一。男女男はるとは凶年か。云に由志はし。なまそ
九つと記して又四人の子孫婦とて人の子孫。父親後たのそ。年病
元子と娘もあふんは。と後の縁なり。あてへらんを物女の煙たどけ

ごろ初月とも御り成り申婦を頼りてきて親見舞のいとこと志
たさ親見舞の御者苦ふせまりてとも二親の娘とまるとかすこくひさか
親子を頼りてかすなり申すも御り成りて金百疋とて奉本と御見舞
娘とともくに背けつてまゝ振廻せと知りぬかたれどもおひは
う御りてまゝどもひかておとおで恨む親をやちし候きまひつゝ
わもづてまゝりまひる事かたぬ候たかま候し申すもやせだん年中
ごもて御り成り申すてあつてつひ月よあたますともかひひつゝは
たあたまよ御見舞をいへて申すもやせつゝも御り成り申すも
のまをよ御見舞にいへて申すもやせしおねのれえかまてつゝも御り
申すもつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
久里(幸)てつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
おながさつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
まも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
おひつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
かよさつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
やまも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
おひつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
横でも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
月よよも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
太も御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
おひつゝも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも
ごも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも御り申すも



新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

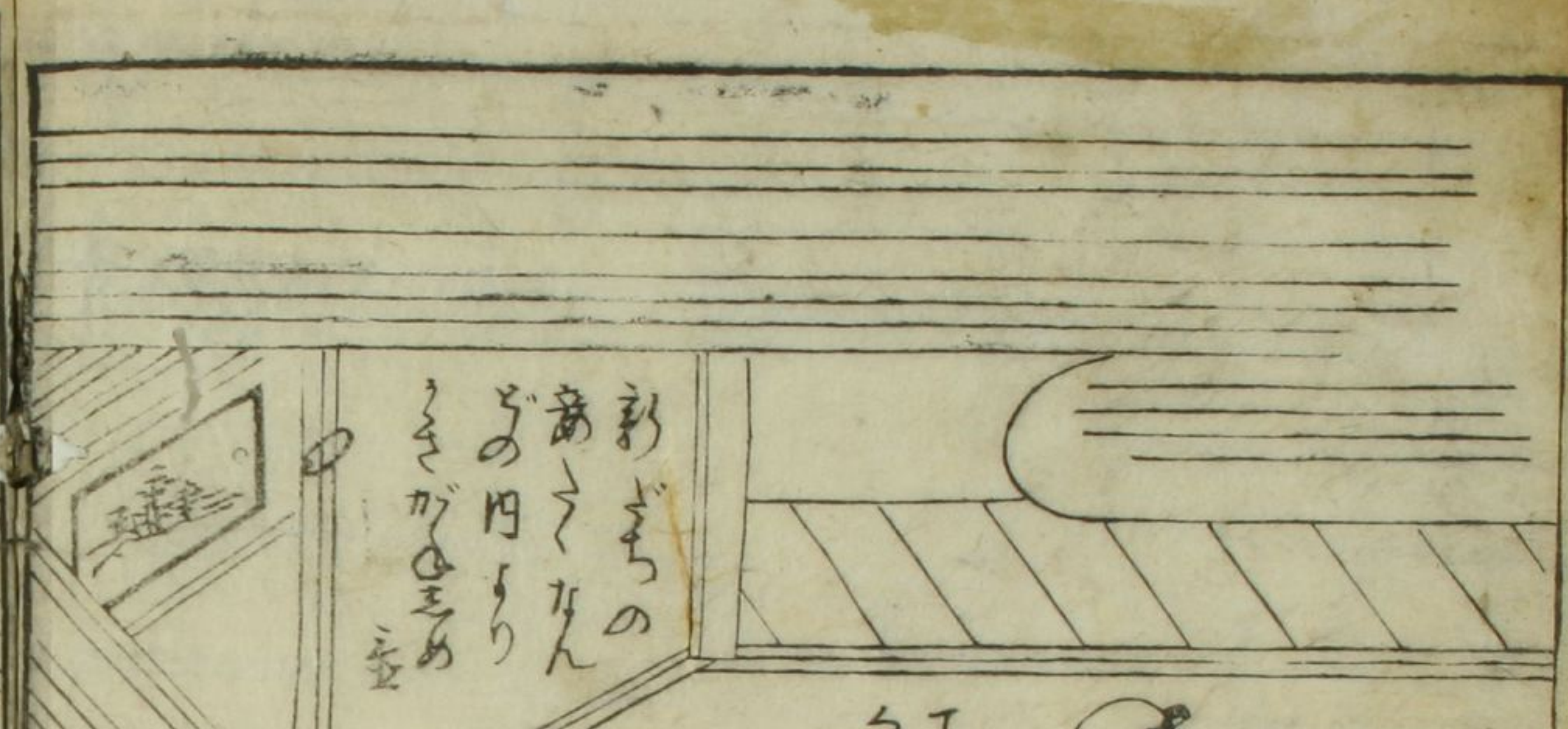


本
 来
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ



新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ



新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

新
 米
 の
 味
 を
 試
 みる
 こと
 が
 一
 つ
 の
 目
 的
 だ

こんどStarkといふ一冊のくはきに、あるものがある。この書には、
 いろいろな事柄が載つてゐる。その中から、
 いくつかを採つて、おもしろいものを選んで、
 本書に載せようと思つた。その一つが、
 ある国の、ある地方の、ある人の、
 ある事柄の、ある話である。その話の内容は、
 非常に面白いものである。その話を、
 本書に載せようと思つた。その一つが、
 ある国の、ある地方の、ある人の、
 ある事柄の、ある話である。その話を、
 本書に載せようと思つた。

つゝと、ある一冊のくはきに、あるものがある。この書には、
 いろいろな事柄が載つてゐる。その中から、
 いくつかを採つて、おもしろいものを選んで、
 本書に載せようと思つた。その一つが、
 ある国の、ある地方の、ある人の、
 ある事柄の、ある話である。その話を、
 本書に載せようと思つた。その一つが、
 ある国の、ある地方の、ある人の、
 ある事柄の、ある話である。その話を、
 本書に載せようと思つた。

すやくとお様のう。やんまきやそきつておやとやそのまにか
 と此の毒飯よ申け。た今よこい毒飯よこいおきよとて毒
 はんず。あまの毒玉がう物おとつておきつてや。由人持神れ
 外らとつらあ申れまじとて。たうまきとてあうらんとそれら
 してけおとつらたのこまおおらうと。お苦度くんどの痛所いたところもまわ
 人食た。夜合まぬ、夜の名醫なまいし。自業じごふにけおらうぶよとてお
 油あぶらの毒もつらとて。我が見くまの毒飯よ申け。そまうら。え
 小麦飯こむぎいしそれいお毒飯どくはん。たておきつておきよとておきよとてお
 もとやうにさうりして。我が毒人ぬら夫婦の中もじつまぶ。おまき
 並井屋の子線なみいでの子せんは苗なえの若芽わかめまじ。今をきく。生なまふさう

若乃娘神日記 甲子巻之終

